

激動の京都で

活躍した

酒井忠義



幕 末の騒乱の舞台となり、混迷が深まっていた京都で幕府の代表である京都所司代として活躍したのが小浜藩主、酒井忠義です。

忠義は、文化10（1813）年に第10代小浜藩主、酒井忠進の子として生まれ、天保5（1834）年に家督を継ぎ、第12代小浜藩主となります。天保13（1842）年には寺社奉行を務め、翌年から嘉永3（1850）年まで京都所司代として、仁孝天皇の葬儀と孝明天皇の即位など天皇の代替わりの際の大役を果たします。

嘉永6（1853）年にペリーがアメリカ東インド艦隊を率いて浦賀

に来航すると、国内は尊王攘夷論・開国論など混乱を極めます。忠義は、安政5（1858）年に再び京都所司代として、大老井伊直弼の政治路線のもとに幕府の開国政策に反対する攘夷派を押しえ込むことになりました。実は、忠義は幕府と朝廷の関係破綻を防ぐことを大切に考え、厳しい弾圧には消極的だったといわれていますが、直弼の腹心・長野主膳に押し切られるように梅田雲浜を捕縛し、安政の大獄の扉を開いたのです。しかし、桜田門外の変の後、失墜した幕府権威を回復し、朝廷と協力して外国に対処するため、公武合体政策を進めていきます。特に孝明天皇の信頼を得て、幕府と朝廷の仲を取り持ち、天皇の妹である和宮と



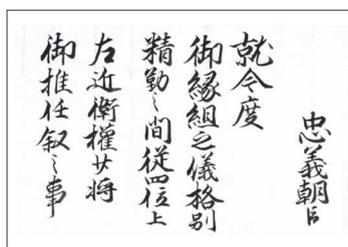
江戸へ降嫁する和宮の行列
(小浜市教育委員会蔵酒井家文庫)

將軍徳川家茂の婚姻、いわゆる和宮降嫁では中心的役割を担い、その功績は、朝廷と幕府の双方から認められました。しかし、忠義の評価は、安政の大獄で処罰された人々の復権により反転します。文久2（1862）年6月には京都所司代を罷免され、岩倉具視や千種有文らと策謀をめぐることで和宮降嫁などの諸政策を進めたこととされて隠居・蟄居処分となります。

その後、鳥羽伏見の戦いでは小浜藩は幕府側として参戦し、朝廷から敵視されましたが、再び藩主となった忠義は、交友関係の深かった岩倉具視を通して誤解を解き、小浜を戦禍から守るとともに、新政府の北陸道鎮撫の先鋒を務めました。

幕末期、京都所司代であった忠義

は、幕府と朝廷の相反する立場に挟まれ、たいへん厳しい情勢の中で、藩祖酒井忠勝以来、守ってきた譜代藩主の立場と自身が担う京都所司代の職責を果たそうとしたのです。



酒井忠義従四位上左近衛権少将叙任指紙
(小浜市教育委員会蔵酒井家文庫)
公武合体、和宮降嫁に尽力した酒井忠義に与えられた官位叙位の書状

関連史料・ゆかりの地

小浜城跡



若狭小浜藩の居城である小浜城は、京極高次が築城を始め、寛永13（1636）年に酒井忠勝の時に完成しました。現在は本丸石垣しか残っていませんが、元々は三重の天守閣、本丸、二の丸御殿などの壮麗な城郭を構え、小浜湾に望む全国でも屈指の水城として知られています。

【住所】小浜市内1丁目（JR小浜駅より徒歩20分）

参考資料等

小浜市史編纂委員会編『小浜市史』通史編上・下 小浜市
小浜市教育委員会文化課編『幕末小浜藩・近代日本を創生した人々の思い』

執筆・協力

小浜市教育委員会文化課